

調査報告

使用頻度から見た在日バングラデシュ人の日本語使用の実態 —留学生と社会人に対する質問紙調査から—

アラム モハメッド アンサルル

キーワード：日常生活、日本語学校の学生、大学・大学院生、社会人、因子分析

要 旨

本論文では、在日バングラデシュ人の日本語使用頻度について質問紙調査を実施した。42項目の4段階評価を用い、在日バングラデシュ人に対し「日常生活における言語行動」について質問した。111人分の回答に対し因子分析を実施し、「求職活動」「医療関連の行動」「交通情報の確認」「地域コミュニティとの関わり合い」「メディアからの情報収集」の5つの因子を抽出した。日常生活に密接な関係を持つ場面と、社会との関わりに関する場面で日本語が使用されていることが分かった。

また、各因子における「日本語学校の学生」「大学・大学院生」「社会人」という3つの身分間の使用頻度の差を見るために、分散分析を行った結果、全体的に「大学・大学院生」より「日本語学校の学生」および「社会人」の日本語頻度が高いことが分かった。「地域コミュニティとの関わり合い」は、使用頻度が低く、身分間に有意差が見られなかった。今回の調査結果は、バングラデシュにおける日本語教育の内容と方法の改善のための基礎資料として意義がある。

1. 研究の背景

現在、バングラデシュの日本語学習者は2,000人あまりといわれている（国際交流基金2012）が、日本語教育の具体的な方針は、政府レベルでも教育現場でも明確に打ち出されていないのが実情である。2010年に発表された最新の教育政策（National Education Policy 2010）においても、日本語を含む外国語教育についての具体的な

方針は述べられていない。政府は、海外に出稼ぎに行く労働者のための英語教育は積極的に行っているが、他の言語に関しては学習の機会をほとんど提供していない。

また、バングラデシュの日本語教育機関においても、現行のシラバスでは、何を学習するかは示されているが、何のために学習するかは考えられていない¹。バングラデシュでは、「日本留学」「就職」などの目的で訪日することを目指している学習者が多い（国際交流基金 2012、アラム 2005、2011 など）が、来日後にどのような場面で日本語が使用されているかを踏まえた授業は実施されていない。また、教師は、学習者が日本で暮らす際にどのような場面で、どの程度日本語が必要になるのかを視野に入れて授業をしていないので、学習者の動機付けや学習方法や学習内容についての確な指導ができてないと考えられる。

日本で暮らすバングラデシュ人にとって、日本の言語や生活に関する情報は、日常生活、学業、そして仕事の上で非常に重要であろう。管見の限りではあるが、在日バングラデシュ人の日本語使用の実態に光を当てた調査研究は非常に限られている。そこで、本稿では在日バングラデシュ人が日本の生活において、どのような場面で日本語を使用し、またその頻度はどのようなものかを調べることにした。

2. 先行研究

在日外国人の日本語使用実態を調べた調査には、名古屋大学（2008）、国立国語研究所（2010）、宇佐美（2010）等がある。名古屋大学（2008）の質問紙および聞き取り調査では、豊田市在住外国人の「日本語使用状況」「日本語能力」「日本語学習に対するニーズ」「学習環境」等を調べ、その結果を踏まえ、日常生活で必要最低限の日本語習得のための支援システムを提案している。国立国語研究所（2010）の質問紙調査では、中国、ブラジル等の在日外国人の日本語使用場面および「接触頻度」「日本語による行動の可否」「学習ニーズの有無」を調べている。これらの2つの調査は、在日外国人の生活の実態に即した適切な日本語教育を提案している点で意義がある。しかし、いずれの調査結果からも、バングラデシュ人の日本語使用実態は明らかにされていない。

宇佐美（2010）は、国立国語研究所（2010）のデータの一部を因子分析し、日本に住む外国人が日常生活の中で日本語を使ってどのような行動をしているのかを、「実行頻度」の視点から報告している。そして、6つの因子（「①生活（サバイバル型）」「②生活（密接交流型）」「③業務」「④子どもの教育」「⑤就職」「⑥医療」）を抽出し、各

因子に結びつく行動として「特定の状況・場所でのみ行われる行動」（第3～第6因子）、「個人的状況を問わず必要となる可能性のある行動」（第1、第2因子）を挙げている。そして、後者の因子得点と調査協力者の日本語能力、滞日歴、職業との関係を分析し、第2因子について職業と日本語能力の間に相関が見られたと報告している。宇佐美（2010）では、学業従事者が一律に「学生」とカテゴリー化されているが、日本に暮らすバングラデシュ人の場合、「日本語学校の学生」「大学・大学院生」「社会人²」が多いと予想されるため、これらの身分別に日本語使用実態を探る必要がある。

また、バングラデシュの日本語教育および日本留学経験者の現状について調査した松本（2000）は、聞き取り調査を通して、留学の成功には、大学だけでなく、生活の場である地域の中で日本人の支援者や親しい友人を得ることが重要であると強調している。このような人間関係構築を日本で実現するための日本語教育をバングラデシュで行うためには、バングラデシュ人の日本での日本語使用実態を把握することが望ましいと思われる。

上記の観点から、本稿では使用頻度に注目して在日バングラデシュ人の日常生活での日本語使用実態を明らかにする。「使用頻度」に絞る理由は、来日を目指す人々のための日本語教育を考える際、学習者はもちろん、教師や機関側にとっても日本でどのような場面で日本語が使用されているかを事前に知っておくことが不可欠であると考えたからである。

また、身分によって日本語使用場面は異なると予想される。現在、バングラデシュ人が日本に入国する場合、「日本語学校」への留学が最も多いことが推察される。日本の文部科学省等の奨学金を得て大学や大学院に留学できる学生も、理工系の学部に見られる。このような学生の人数は、それほど多くないが、大学留学を希望する学習者は一定数おり、将来増加する可能性がある。また、日本の企業に就職するバングラデシュ人も少数ではあるが存在する。このような現状を踏まえ、本稿では、「日本語学校の学生」「大学・大学院生」「社会人」の身分の違いによって、使用頻度がどう異なるかを明らかにする。そして、来日を目指すバングラデシュ人日本語学習者にどのような教育が適切であるか、それについて基礎的な知見を得ることを目的とする。

具体的に次の2つの課題を設定する。

課題1：在日バングラデシュ人は日常生活のどのような場面で日本語を多く使用しているか。

課題2：「日本語学校の学生」「大学・大学院生」「社会人」3つの身分の違いによって、日本語使用場面がどう異なるか。

3. 調査・分析

3.1. 調査内容

在日バングラデシュ人の日本語使用について、「日常生活」「学校」「職場」「子供の教育」という4つの場面、計70項目に対して「どれくらい経験しているか(使用頻度)」「どれくらい難しいと感じているか(困難度)」「どれくらい必要だと考えているか(必要度)」を尋ねた。「使用頻度」と「必要度」は4段階評価で、「困難度」は5段階評価で調査した。調査票の詳細は、添付資料①を参照されたい。なお、本稿では、「日常生活」の場面の42項目の「使用頻度」を集計・分析し、結果を報告する。

質問項目は、国立国語研究所(2010)の調査票から32項目、名古屋大学(2008)から8項目、文化庁(2010)から5項目を抽出し、バングラデシュ人が回答することを念頭において、筆者が必要に応じて加筆修正を加え、最終的に38項目に絞った。さらに、筆者自身の生活経験から今回の調査で質問に含めた方がいいと判断した4項目を追加し、計42の質問項目を作成した。筆者が加えた4項目は、「項目27:テレビの娯楽番組(バラエティ・ドラマなど)を見て理解する」「項目29:フェイスブック等のSNSを使い、友人・知人と日本語でやり取りする」「項目30:知人の日本人に生活上の問題について相談する」「項目35:日本人に自分の宗教上の習慣について説明する」であった。

調査票は、ベンガル語で作成した。また、英語版も作成し、希望する協力者に配布した。調査期間2014年6月～8月にかけて手渡し、メール、郵送で調査票を配付した。

3.2. 協力者

今回の調査は、バングラデシュの帰国留学生会(Japanese Universities Alumni Association in Bangladesh)や筆者の知り合いのネットワークを活用し、日本に住むバングラデシュ人350人に調査協力を依頼した。在日バングラデシュ人の日本語使用の全体的な傾向を掴むことが目的であったため、年齢、性別、職業・身分、滞日期间、日本語能力等を限定せず、最終的に131人から回答を得た(回収率:37.4%)。

131人の協力者は、男性が113人、女性が18人であった。調査時点の身分は、日本語学校の学生が26人、大学・大学院生が39人、社会人が49人、家族滞在者が11人、その他は6人であった。また、日本語学習経験がある協力者は107人、ない協力者は24人であった。

本稿では、家族滞在11人とその他の身分の6人を除き、114人分のデータを集計した。作業の過程で、分析不可の要素があった3人を除外し、最終的に111人分のデータを分析対象とした。

4. 結果・考察

4.1. 日常生活に関連した項目より抽出された因子

SPSS 22.0バージョンで日常生活上の42項目の使用頻度に関する回答を因子分析した。42項目について、検出力の高い最尤法による因子分析を行い、初期の固有値が1.0以上に達した10因子を説明因子として採用した。ついで因子間の相関を仮定して斜交回転（プロマックス法）による回転を行い、因子負荷量の絶対値が0.40に満たない項目を削除しつつ分析を反復し、最終的に21項目を分析対象とした。その結果、表1に示した5つの因子が抽出された。この段階でデータのKMO値は0.807、バートレットの球面性検定は0.1%水準で有意であり、このデータが因子分析に適合することが確認された。また、5因子の信頼性を検証するために、それぞれに対する α 係数を求め、5因子のいずれも α 係数は0.8以上であり、因子が尺度として有効であることも確認した。

因子分析で得られた5つの因子は、以下のように命名した。第1因子は、「履歴書を書く」「就職面接を受ける」「契約書を読む」「求人条件を問い合わせる」「求人広告を読む」の5項目からなり、いずれも求職活動に関わりが深い行動であることから、「求職活動」と命名した。第2因子は、「病状を説明する」「医師の説明を理解する」「問診表に記入する」「薬の説明を読む」の4項目からなり、いずれも医療関連の行動であることから、「医療関連の行動」と命名した。第3因子は、「駅員への質問」「駅や車内でのアナウンスを理解する」「路線図や時刻表を読む」「ネットで路線案内を確認する」の4項目からなり、いずれも交通に関する情報収集に関連する行動であることから、「交通情報の確認」と命名した。第4因子は、「地域の施設利用」「近所の人とのトラブル対応」「地域イベントへの参加」「ごみの出し方についての質問」の4項目からなり、いずれも地域コミュニティとの関わり合いに関連する行動であることから、「地域コミュニティとの関わり合い」と命名した。最後に、第5因子は、「チラシや掲示板」「テレビのニュース」「テレビやネットの天気予報」「テレビの娯楽番組」の4項目からなり、さまざまなメディアが提供する情報を理解できるかどうかに関連する行動であることから、「メディアからの情報収集」と命名した。抽出された因子の統計量を第1表に示す。

表 1：5 因子の統計量（パターン行列の因子負荷量）

項目	言語行動	因子				
		1	2	3	4	5
因子 1：求職活動						
40	日本語で履歴書を書く	.949	-.034	-.017	-.093	.007
41	日本語で就職面接を受ける	.877	.039	-.061	.143	-.057
42	仕事の契約書（会社や工場、アルバイトなど）を読んで内容を理解する	.829	.057	.073	-.187	.127
39	電話で求人条件の不明な点について問い合わせる	.808	.020	.110	.256	-.195
38	求人広告を読み、条件を理解する	.734	-.002	-.071	.131	.176
因子 2：医療関連の行動						
19	病院で医者や看護師に症状を説明する	-.039	.956	.094	-.036	-.036
20	病気・けがについて医者の説明を理解する	.027	.942	-.032	-.123	.114
18	病院で初診の受付をして、問診表に記入する	.021	.801	-.022	.121	-.213
21	薬局で出された薬に書かれた説明（種類、飲み方など）を確認する	.063	.655	-.132	.048	.132
因子 3：交通情報の確認						
8	駅員に行き方や乗り換えなどについて質問する	-.097	-.079	.828	.106	-.114
7	駅の構内や乗り物の中でアナウンスを聞く	.058	-.078	.718	-.031	.150
9	路線図や時刻表を読む	.193	.052	.711	-.158	.072
10	ネットで「路線案内」を確認する	-.059	.052	.629	.133	.119
因子 4：地域コミュニティとの関わり合い						
37	地域の施設（図書館、公民館、スポーツ施設等）の使用方法を係りの人に聞く	.207	.012	.085	.796	-.164
34	近所の人とのトラブルに対処する	.039	-.154	-.073	.712	.209
33	国際フェアや地域の祭りなどのイベントに参加して、日本人と雑談する	-.142	.109	.077	.630	.302
31	近所の人にゴミの出し方について尋ねる	-.022	.004	-.001	.617	.025
因子 5：メディアからの情報収集						
32	自宅へのチラシや掲示板などから必要な情報を読み取る	-.132	.020	.122	.112	.747
26	テレビのニュースを見て理解する	.341	-.118	-.011	-.101	.683
25	テレビやネットで天気予報を理解する	.022	.153	.081	.155	.512
27	テレビの娯楽番組（バラエティ・ドラマなど）を見て理解する	.208	-.046	-.138	.113	.493

表 1 から在日バングラデシュ人が「医療関連の行動」「交通情報の確認」のような日常生活に密接な関係を持つ場面と、「地域コミュニティとの関わり合い」「求職活動」「メディアからの情報収集」のような社会との関わりに関係する場面で日本語を使用していることが分かった。

4.2. 身分による言語行動の違い

身分ごとに日本語の使用頻度の違いを見るために、まず因子得点を算出した。因子得点の平均と標準偏差を表2に示す。本稿では4段階評価の回答において、日本語使用経験がよくある場合は1、全くない場合は4として回答を求めたため、因子得点の低い方が使用頻度が高いことを表している。

表2：身分ごとの因子得点の平均と標準偏差（括弧内は標準偏差）

	第1因子：求職活動	第2因子：医療関連の行動	第3因子：交通情報の確認	第4因子：地域コミュニティとの関わり合い	第5因子：メディアからの情報収集
日本語学校の学生	-0.17 (0.71)	0.72 (0.85)	-0.26 (0.72)	-0.18 (1.04)	0.04 (0.68)
大学・大学院生	0.67 (0.75)	-0.03 (0.97)	0.38 (1.18)	0.19 (0.91)	0.46 (0.88)
社会人	-0.40 (1.01)	-0.36 (0.84)	-0.14 (0.76)	-0.05 (0.92)	-0.36 (0.94)

次に、身分によって因子得点にどのような差があるのかを確認するために、2要因分散分析を行った。第1の要因は日本語使用頻度の5つの因子で被験者内要因であった。第2の要因は3つの身分で被験者間要因であった。

分散分析の結果、身分の主効果が有意であった ($F(2, 108) = 7.311, p < .005$)。因子の主効果は有意ではなかった ($F(4, 432) = 0.532, n.s.$)。また、身分×因子の交互作用が有意であった ($F(8, 432) = 9.067, p < .001$)。単純主効果の検定を行った結果、「求職活動」 ($F(2, 540) = 13.637, p < .001$)、「医療関連の行動」 ($F(2, 540) = 13.360, p < .001$)、「交通情報の確認」 ($F(2, 540) = 5.027, p < .05$)、「メディアからの情報収集」 ($F(2, 540) = 7.148, p < .001$) の単純主効果が有意であった。また、「日本語学校の学生」 ($F(4, 432) = 11.813, p < .001$)、「大学・大学院生」 ($F(4, 432) = 5.062, p < .001$) の単純主効果も有意であった。

Ryan法による多重比較を行った結果、以下のことが明らかとなった。まず、第1因子「求職活動」では、「社会人」は、「大学・大学院生」よりも因子得点が低いこと ($t(540) = 5.43, p < .05$)、「日本語学校の学生」は、「大学・大学院生」よりも因子得点が低いこと ($t(540) = 3.65, p < .05$) が示された。「求職活動」に関する場面では「日本語学校の学生」と「社会人」の日本語使用頻度が「大学・大学院生」より高いことが示唆された。

第2因子「医療関連の行動」では、「社会人」は、「日本語学校の学生」よりも因子得点が低いこと ($t(540) = 5.00, p < .05$)、「大学・大学院生」は、「日本語学校の学

生」よりも因子得点が低いこと ($t(540) = 3.25, p < .05$) が確認された。第2因子の因子得点の平均は「社会人」が最も低く、「日本語学校の学生」が最も高かった。「社会人」と「大学・大学院生」が共に「日本語学校の学生」の因子得点を有意に下回っていたが、「大学・大学院生」と「社会人」の間に有意差は見られなかった。

第3因子「交通情報の確認」では、「日本語学校の学生」は、「大学・大学院生」よりも因子得点が低いこと ($t(540) = 2.78, p < .05$)、「社会人」は「大学・大学院生」よりも因子得点が低いこと ($t(540) = 2.66, p < .05$) が確認された。「日本語学校の学生」と「社会人」の日本語使用頻度が「大学・大学院生」より高いことが示唆された。

第4因子「地域コミュニティとの関わり合い」では、いずれも有意差は見られなかった。4段階評価でこの因子にまとめられた項目の低位尺度平均点³は3.178であり、すべての因子の中で使用頻度が最も低いことが分かった。

第5因子「メディアからの情報収集」では、「社会人」は、「大学・大学院生」よりも因子得点が低いこと ($t(540) = 4.14, p < .05$) が確認された。「日本語学校の学生」と「大学・大学院生」あるいは「社会人」の間に有意差は見られなかった ($t(540) = 1.81$)、($t(540) = 1.82$)。この因子得点の平均から最も使用頻度が高いのは「社会人」で、「大学・大学院」は最も低いことが分かった。

また、「日本語学校の学生」については、第1因子「求職活動」($t(432) = 4.68, p < .05$)、第3因子「交通情報の確認」($t(432) = 5.140, p < .05$)、第4因子「地域コミュニティとの関わり合い」($t(432) = 4.71, p < .05$)、と第5因子「メディアからの情報収集」($t(432) = 3.58, p < .05$) の4因子が第2因子「医療関連の行動」より因子得点が低いことが確認された。

そして、「大学・大学院生」については、第2因子「医療関連の行動」($t(432) = 4.27, p < .05$)、と第4因子「地域コミュニティとの関わり合い」($t(432) = 2.92, p < .05$) が第1因子「求職活動」より因子得点が低いことが確認された。また、第2因子「医療関連の行動」($t(432) = 2.97, p < .05$) は、第5因子「メディアからの情報収集」より因子得点が低いことが確認された。

4.3. 考察

在日バングラデシュ人の日本語使用頻度に関する項目の因子分析を行った結果、「求職活動」「医療関連の行動」「交通情報の確認」「地域コミュニティとの関わり合い」「メディアからの情報収集」の5因子が抽出された。第1因子では、「求職活動」に関する場面では「日本語学校の学生」と「社会人」の日本語使用頻度が「大学・大学院生」

より高いことが示唆された。この背景には、現時点の身分が「社会人」の約4割は、来日時点での身分が「日本語学校の学生」であったため、現在、「日本語学校の学生」と同様に、アルバイト等で「求職活動」をしていたことが考えられる。山本・荒木(2009)が述べているように、在日バングラデシュ人は在留資格が「就学生⁴⁾」や「研修生」の場合であっても、実態は単純労働者であることも珍しくない。「日本語学校の学生」のほとんどは私費で留学し、生活を維持するためにアルバイトをしなければならない。一方、「大学・大学院生」の多くは奨学金で留学していることから、「求職活動」の優先順位が低いと考えられる。

第2因子「医療関連行動」では、「社会人」と「大学・大学院生」が共に「日本語学校の学生」の因子得点を有意に下回っていた。そして「大学・大学院生」と「社会人」の間に有意差は見られなかった。その原因としては、医療費が考えられる。「日本語学校の学生」の多くは経済的に厳しい状況にある。「大学・大学院生」や「社会人」の場合、保険に加入している割合が高いが、アルバイトで生活している「日本語学校の学生」の場合、自費で健康保険に加入することは容易ではないと思われる。

第3因子「交通情報の確認」では、「日本語学校の学生」と「社会人」の日本語使用頻度が「大学・大学院生」より高いことが示唆された。今回の調査協力者のほとんどは、関東と関西の都市部在住で、車内アナウンスや駅などの情報の多くは英語で理解可能である。「大学・大学院生」の多くは日本語よりも英語の運用能力がはるかに高いので、英語が使用可能な場所では、日本語使用の必然性が低いと考えられる。

第4因子「地域コミュニティとの関わり合い」では、いずれも有意差が見られなく、すべての因子の中で使用頻度が最も低かった。このことから、身分にかかわらず、在日バングラデシュ人は地域コミュニティとの関わり合いが少ないことが分かった。

第5因子「メディアからの情報収集」では、最も使用頻度が高いのは「社会人」で、「大学・大学院」は最も低いことが分かった。この因子にはテレビやネットを通じた情報源がまとめられている。日本語でのニュースやネット利用は、主に英語で研究活動をしている「大学・大学院生」にとってそれほど必要ではないと考えられる。大学でのサバイバル日本語を学習している「大学・大学院生」もいるが、ニュースやネットの情報を理解することは難しいと考えられる。

上記の結果をまとめると、「大学・大学院生」は、多くの場面で日本語使用頻度が低いことが分かる。その理由として、「大学・大学院生」のほとんどは、奨学金などで生活し、研究活動も英語で行っていることが考えられる。そして、「日本語学校の学生」と「社会人」の使用頻度が同傾向にあることが明らかになった。その原因とし

て、「社会人」の多くはもともと日本語学校の卒業生で、同じような日本語使用経験をしていることが考えられる。但し、「医療関連の行動」の場面では、「日本語学校の学生」の使用頻度が低いことは、健康保険等に加入していないケースも少なくないからと考えられる。

さらに、本稿では、第4因子、「地域コミュニティとの関わり合い」について興味深い結果が得られた。前述したように、松本（2000）は、留学の成功には日常生活における支援者や親しい友人を日本人の中に見つけることが重要であると述べているが、本稿の結果、「地域コミュニティとの関わり合い」の因子は、日本語の使用頻度が最も低く、また身分間に有意差が見られなかった。つまり、在日バングラデシュ人は、周囲の日本人との関係が希薄であることが窺える。筆者は人間関係構築を実現するための日本語教育を検討したいと考えており、今回の結果からその必要性を再確認した。

これまで在日バングラデシュ人の日本語使用実態を調査し報告した研究はほとんどなかったが、本稿でその一端が明らかになった。これらの結果は、今後、バングラデシュの日本語教育の学習目標や学習内容、さらには学習方法や学習者の動機づけなどを検討する際の基礎資料とすることができる。また、本稿では身分によって日本語の使用頻度がどのように異なるかについても調べた。その結果、「地域コミュニティとの関わり合い」を除く4因子について、「大学・大学院生」は、他の2つの身分（「日本語学校学生」と「社会人」）に比して、日本語の使用頻度が低いことが確認された。日本への留学を希望する学生でも、日本語学校を目指すのか、大学・大学院を目指すのかによって、学習内容や学習方法を調整する必要があることが示唆された。

5. 今後の課題

今後は、バングラデシュの日本語教育の学習目標や学習内容の改善の手がかりを得るために、今回の質問紙調査で得られた5因子について、インタビュー調査を行う予定である。在日バングラデシュ人の生活にどのような問題が生じどのように解決してきたか、さらには日本語使用を通して日本社会との関わり合いがどのように変化してきたかについて、更なる理解を深めていきたい。継続的に調査を行うことで、今後のバングラデシュの日本語教育のために、コースやカリキュラム、シラバスのデザインについて考える基礎資料を充実させていきたいと考えている。人間関係構築を実現するための日本語教育についても今後、更なる検証を進めていきたい。

注

- 1 筆者の所属機関であるダッカ大学や以前調査したジャハングルナガル大学のシラバスにおいても大まかに「日常的な表現」「基本的な日本語文法」「書き方と発音の練習」「聴解力の上達」と数行で記述されるに留まり、シラバスの詳細が明確ではなく、日本語教育の目的も全く記述されていない。
- 2 本稿では「営業職」「自営業」などに従事する日本在住者を「社会人」と示す。
- 3 下位尺度点とは、各因子に含まれる項目の平均点の合計を項目数で割って算出された得点のことである。因子4の場合、含まれている4項目の平均点の合計を4で割り、下位尺度点を算出した。
- 4 当時の「就学生」は「日本語学校の学生」を示しており、2010年以降は在留資格が一本化された。

文献

- アラム・モハメッド・アンサルル (2005) 「会話力を高めるための授業の提案—バンガラデシュの日本語学習者を対象に—」『日本言語文化論集』創刊号 149-176
- アラム・モハメッド・アンサルル (2011) 「バンガラデシュの大学生が日本語を継続しにくい要因—動機付けに関わるインタビュー調査から—」『政策研究大学院大学日本語教育指導者養成プログラム第10周年記念シンポジウム報告書』58
- 宇佐美洋 (2010) 「実行頻度からみた「外国人が日本で行う行動」の再分類—「生活のための日本語」全国調査から—」『日本語教育』144号 145-156
- 国立国語研究所 (2010) 『「生活のための日本語」に関する基盤的研究—段階的発達の支援をめざして— (中間報告書)』
- 名古屋大学 (2008) 『外国籍住民の日本語学習における実態等予備調査 委託調査報告書』(平成19年度豊田市委託事業)
- 松本久美子 (2000) 「バンガラデシュにおける日本語教育・日本留学事情」『長崎大学留学生センター紀要』第8号 101-114
- 山本真弓・荒木一視 (2009) 「バンガラデシュにおける人口移動と社会階層—農村部から日本への出稼ぎ労働者を中心に—」『山口大学文学会誌』59号 75-95

国際交流基金のサイト (2012 年度 日本語教育機関調査)

《<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/survey12.html>》 2014 年 9 月 28 日
アクセス

在バングラデシュ日本大使館のサイト (Statistical Information)

《<http://www.bd.emb-japan.go.jp/en/education/statiscalInfo.html>》 2014 年 8 月 9 日
アクセス

日本法務省のサイト (出入国管理統計表)

《http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_nyukan.html》 2014 年 8 月 9 日
アクセス

文化庁のサイト (「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について)

《http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/kyouiku/nihongo_curriculum/pdf/curriculum_ver09.pdf》 2014 年 9 月 30 日アクセス

バングラデシュ教育省のサイト (National Education Policy 2010)

《http://www.moedu.gov.bd/index.php?option=com_content&task=view&id=338&Itemid=416》
2014 年 9 月 30 日アクセス

(政策研究大学院大学・国際交流基金日本語国際センター 博士後期課程)

添付資料① 質問紙調査の【日常生活】に関する質問の部分

B. 日常生活での日本語使用についてお答えください。

(1) あなたは日本語で次のような経験をどれぐらいしたことがありますか？下の表の右の1～4から一つ選んでください。(2) そのとき、どれぐらい難しいと感じましたか。1～4から一つ選んでください。今まで一度も経験したことがない人は、「5. わからない」を選んでください。(3) 現在のあなたにどれぐらい必要ですか？1～4から一つ選んでください。
例：あなたは知り合いの日本人にいつも挨拶していて、日本語でそれは全然難しいと思わないし、とても必要な行動だと思っている場合、下の表の1行目の【例】のように答えてください。○でも✓でもOKです。

言語行動（項目）【日常生活】 項目1～42		(1) 経験がありますか よくある = 1 時々ある = 2 あまりない = 3 全然ない = 4				(2) どれぐらい難しいですか とても難しい = 1 かなり難しい = 2 あまり難しくない = 3 全然難しくない = 4 分からない = 5					(3) どれぐらい必要ですか とても必要 = 1 時々必要 = 2 あまり必要ではない = 3 全然必要ではない = 4			
例	知り合いの日本人に挨拶をする →	①	2	3	4	1	2	3	④	5	①	2	3	4
1	飲食店で写真のあるメニューを読んで注文する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
2	飲食店で店員に料理の材料を確認する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
3	買い物のとき、食品の材料の表示を読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
4	店内で買いたいものの場所を店員に尋ねる	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
5	店で買った品物の返品や交換をする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
6	ほしい物をネットで注文する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
7	駅の構内や乗り物の中でアナウンスを聞く	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
8	駅員に行き方や乗り換えなどについて質問する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
9	路線図や時刻表を読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
10	ネットで「路線案内」を確認する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
11	銀行や郵便局の窓口で現金の引出、振込、送金などをする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
12	現金自動支払機(ATM)で現金の引出、振込、送金などをする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
13	引越しのとき、役所に住所変更等の手続きをする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
14	日本語で書かれた賃貸契約書を読んで理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
15	困ったとき、アパートの管理人・大家さんに相談する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
16	役所や国際交流協会の交流イベントのお知らせを読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
17	在留期間の延長などについて役所などの外国人相談窓口で相談する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
18	病院で初診の受付をして、問診表に記入する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
19	病院で医者や看護師に症状を説明する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
20	病気・けがについて医者の説明を理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
21	薬局で出された薬に書かれた説明(種類、飲み方など)を確認する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
22	役所や勤務先からの定期健診に関する通知を読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
23	災害・事故時に他の人に助けを求める	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
24	テレビやラジオの災害情報を理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
25	テレビやネットで天気予報を理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
26	テレビのニュースを見て理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
27	テレビの娯楽番組(バラエティ・ドラマなど)を見て理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
28	近所の人に挨拶をする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
29	フェイスブック等のSMSを使い、友人・知人と日本語でやり取りする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
30	知人の日本人に生活上の問題について相談する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
31	近所の人にゴミの出し方について尋ねる	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
32	自宅へのチラシや掲示板などから必要な情報を読み取る	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
33	国際フェアや地域の祭りなどのイベントに参加して、日本人と雑談する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
34	近所の人とのトラブルに対処する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
35	日本人に自分の宗教上の習慣について説明する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
36	知らない人や機関から初めてかかってきた電話に対応する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
37	地域の施設(図書館、公民館、スポーツ施設等)の使用方法を係りの人に聞く	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
38	求人広告を読み、条件を理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
39	電話で求人条件の不明な点について問い合わせる	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
40	日本語で履歴書を書く	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
41	日本語で就職面接を受ける	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
42	仕事の契約書(会社や工場、アルバイトなど)を読んで内容を理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4

A Frequency based Study of Japanese Language Use by Bangladeshi Residents in Japan -From a Questionnaire Survey of Foreign Students and Working People-

ALAM Mohammed Ansarul

Key words: Daily life, Japanese language student, University student, Working people, Factor analysis

Abstract

The purpose of this paper is to investigate the frequency based language use of Bangladeshi nationals living in Japan. A 4 scale questionnaire survey on the use of Japanese language in daily life, consisting 42 items, is conducted. A factor analysis is conducted with the answers of the 111 respondents. The analysis results reveal 5 factors; namely “F1: Job searching” “F2: Medical related acts” “F3: Confirm the information of transport” “F4: Involvement with local community” and “F5: Gathering information from media”. It is found that Bangladeshi nationals use the Japanese language primarily in their immediate daily life activities, as well as in their interactions with Japanese society.

Further, to investigate the differences among the “Japanese language student” “university student” “working people”, ANOVA analysis is conducted. It is found that university students use less Japanese language in daily life. In factor “F4: Involvement with local community”, frequency of Japanese language use is low and no significant difference was found among the groups.

Findings of this survey are expected to be used as a basis for improving the methods and content of Japanese language education in Bangladesh.

(Doctoral Student, National Graduate Institute for Policy Studies &
The Japan Foundation Japanese Language Institute)